ロマンス語研究

STUDIA ROMANICA

19

Préface . . . . . Hiroo CHIKAMATSU 1

O Infinitivo Persoal cun Pronome Reflexivo *se* en Galego . . . . . Takekazu ASAKA 3

Studi sull'articolo nella lingua italiana . . . . . Michio IURA 9

Pretérito perfeito composto em português . . . . . Shiro IYANAGA 23

Ensayo de una clasificatión tipológica de las lenguas europeas
según la expresión del futuro . . . . . Tadao SHIMOMIYA 35

Em torno dos usos de *se* na língua portuguesa: na voz passiva
e como pronome reflexivo . . . . . Junji SUMIE 43

L'influence des grammaires latines de l'Antiquté et du moyen-âge
sur les *Lays d'Amors* . . . . . Kazuko TADA 49

Sobre la construcción "tough" en las lenguas románicas,
especialmente en el español . . . . . Noritaka FUKUSHIMA 61

Ordine die clitici in italiano . . . . . Masaaki FUJIMURA 71

Il futuro nell'italiano e nelle lingue romanze . . . . . Shigeaki SUGETA 85

Informe del Ier Congreso asiático de Hispanistas . . . . . Hiroo CHIKAMATSU 92

日本ロマンス語学会

SOCIETAS JAPONICA STUDIORUM ROMANICORUM

1 9 8 6

◇　目　　次　◇

まえがき …… 近松洋男 1

ガリシア語における再帰代名詞 se を伴う人称不定詞 …… 浅香武和 3

イタリア語冠詞論 …… 猪浦道夫 9

ポルトガル語の複合過去 …… 彌永史郎 23

ロマンス諸語および他のヨーロッパ諸語における未来の表現 …… 下宮忠雄 35

ポルトガル語の再帰代名詞 se の用法中、受動態を表す se に就いて …… 住江淳司 43

L'influence des grammaires latines de l'Antiquité et du moyen-âge sur les *Lays d'Amors* …… 多田和子 49

ロマンス語の tough 構文について …… 福嶌教隆 61

イタリア語における clitic の機能と構造 …… 藤村昌昭 71

Il futuro nell'italiano e nelle lingue romanze …… 菅田茂昭 85

第1回アジヤイスパニスタ会議報告 …… 近松洋男 92

ポルトガル語の複合過去

Pretérito perfeito composto em português

彌永史郎
Shiro IYANAGA

I はじめに[1)]

現代のロマンス諸語には、一般にラテン語のhabeo＋過去分詞に由来する時称が存在する。しかしながら、1982年度第18回大会の統一テーマとしてとりあげられた際にも明らかになったように、「複合過去」という名称は必ずしも各国語に共通のものではなく、場合によっては、一言語内でさえ複数の名称が用いられている。

ポルトガル語では、概ね Pretério Perfeito Composto で統一されているが、これに相当する日本語の訳語の方は、複合完全過去、完了過去、現在完了とさまざまで統一とは程遠い状態である。[2)] 本来 perfeito は「完了」の意味であろうから「完全」という訳語は適切でないように思われる。しかし本稿で明らかになるように、ポルトガル語の tenho + p.p. の形式があらわす意味は完了とは無縁である。[3)] とするとすでにポルトガル語の段階で不適切な用語が用いられていることになる。しかしながら本稿では tenho + p.p. の形式について、その名称の是非に関してはこれ以上立ち入らず、以上概観した不都合を踏まえたうえで、以下 tenho + p.p. を「過去複合形」あるいは単に「複合形」と呼び、その時称を「複合過去」と呼ぶことにする。

ロマンス諸語においては、過去の意味をあらわす場合、複合形が単純形よりも好まれ頻度のうえでも明らかに優位にあるか、もしくは複合形と単純形とが微妙な意味の差を保ちつつ並用されていることが知られている。ところがポルトガル語ではこうした一般的傾向に反して、ラテン語の完了形から派生した単純形が本来の過去の意味をそのまま維持しており、同じ過去の意味において複合形と競合するような事態は起っていない。

それではポルトガル語の複合形はどのような意味機能を担っているかというと、概ね(1)過去のある時点から現在に至る期間、ある状況が不定回数くり返し実現したこと（以下必要に応じて単に「反復」とする）あるいは(2)過去のある時点から現在に至る期間、ある状況が中断せず実現したこと（同様に、単に「継続」とする）をあらわすことが明らかになっている。こうしたポルトガル語に特有の事情については、他のロマンス諸語が助動詞として一般に HABERE を受け継いだのに対しポルトガル語とガリシア語は TENERE を選んだという形式面での特徴とあわせて、第18回大会の際池上岑夫教授が発表された通りである。

ポルトガル語の複合過去に関するまとまった研究は Manuel de Paria Boléo による O perfeito e o pretérito em português em confronto com as outras línguas românicas, Coimbra, 1936. 以来目立ったものはなく、それ以外はアスペクト研究の一部として扱われることがある程度である。とりわけ複合形の成立に関わる通時的な研究はBoléo以外知られていない。Boléo の説にはまだ明らかでない部分も少なからず見られるが、以下では主にBoléoの説に従い、必要に応じてその他の文献も参照しつつ、[4)]

複合過去の成り立ちを通時的に概観し、そのうえで、現代ポルトガル語における複合過去の意味をより詳しく検討してみたい。

Ⅱ　複合過去の成り立ち

ポルトガル語の過去単純形を生んだラテン語の完了形は、(1)発話の時点ですでに終っている動作、および(2)過去の行為の現在における結果を示すという二重の機能を持っていた。[5] しかし完了形の機能が本来的意味である(1)の純粋な過去をあらわすことに限定されていくにつれて、(2)の完了の意味をあらわすため、habeo + p.p. という迂言法が用いられるようになり、これが次第に一般化していった。

初期の habeo + p.p. でみられた過去分詞と habere の直接補語との性数等一致が失なわれていくにつれて habere の所有の意味も薄れ、 habere は単なる機能語となる。その後多くのロマンス諸語において habeo + p.p. 型複合形が単純形を駆逐し、今日では複合形が純粋な過去をあらわすようになっているが、ポルトガル語はこうした一般的傾向とは異なる変化の道をたどった。

まず galego-português の最古の文献とされるものがあらわされた１３世紀以降１６世紀に至るまでの時期において、[6] 形式的にみれば、haver あるいは ter を助動詞とする二種類の複合形が、概ね前者が優勢のうちに共存していた。また限られた範囲の自動詞 (morrer, chegar, ir など) は ser を助動詞とする過去複合形を形作っていた。いずれにせよ１3〜１6世紀の文献についての Beléo の調査によれば、これらの複合形は過去の意味をあらわしているにも拘らず、他のロマンス諸語の場合とは異なり、単純形とは競合するどころか圧倒的な劣勢におかれていたのである。

いっぽう形式に目を移せば、複合形の助動詞として用いられたいた haver と ter の勢力関係が逆転しはじめたのは１５世紀のことであったと言われる。haver は２０世紀初頭にも、文体的変種として時折あらわれる。しかし、独立の動詞として所有の意味をあらわす場合も含め、１６世紀初期には ter の haver に対する優勢が決定的となった。そして ter の直接補語と過去分詞との性数一致が失なわれていくにつれて ter が単なる機能語と化し完全に haver の座を奪うことになる。

ポルトガル語の複合過去については、おおよそ以上のごとく通時的に概観できるが、肝腎の意味の変遷がはっきりしていない。複合形が過去の意味をあらわしていた以上、意味の面で単純形と競合する可能性を持っていたにも拘らず、単純形の圧倒的優勢のもとに複合形は発展に至らなかったのは確かである。しかも、 Boléo によって引用された例から判断する限り、助動詞として haver よりも ter が好んで用いられるようになってからも、複合過去の意味は依然として「過去」の意味である。そして、複合過去の「過去」の意味をあらわす機能が廃れていくにつれ、現代の複合過去の意味 ── 「反復」あるいは「継続」── が生じてくるのは、引用例によればごく最近、恐らく前世紀半ば以降ということになってしまう。しかし、この点について Boléo は明言を避け、複合過去の現代的意味の由来についてはっきり述べてはいない。というよりは、１５世紀の年代記作家 Fernão Lopes の Crónica de D. João I の調査結果からもわかるように、[7] 使用頻度が少なすぎて例が集まらず結論を下すに至らないと原った方が正確であろう。[8]

いずれにせよ現代ポルトガル語の複合過去があらわす特殊な意味の成立は未だ謎に包まれており、これを解明すべくより実証的な研究が待たれるのが実情である。

Ⅲ　複合過去の意味

《 意味分析の方法 》

ポルトガル語の複合過去の意味は、さまざまな議論を通じて次第に明らかにされてきた。ここでその研究史を詳細に扱うことはできないが、可能な範囲で簡単に触れてみたい。

複合過去の意味は Dias (1918) によって既に以下のように定義された (p. 189).

O pretérito indefinido exprime a continuação ou repetição d'uma acção desde certo momento até o momento em que fallamos.

しかしながら、その後 Boléo (1936) は、Gonçalves Viana が複合過去を Prétérite itératif と呼びその意味を反復に限ったのに異義を唱える形で、「複合形は反復だけでなく継続もあらわすこと」を例証した（p. 127）。以来これが定説となり、これ以後あらわれた文献には大抵この Boléo の説が引用されるようになっている。

しかし、こうした直観的解釈による意味の記述を超えて「反復」の意味を、副詞句と意味的に共起可能か否かによって、より正確に定義し得ることを示唆したのは Martin (1976) であった。 Martin は大過去複合形 (e.g. tinha gritado) の二義性を論ずるうえで、テンスの要素として anteriority を示す TER 1 を仮定すると共に indefinite iteration を示す TER2 を仮定し以下のようにのべている (p. 10).

Thus, such strings as

(29) (a) *Ele tem feito isso duas vezes.

(b) *Eu ainda não tenho visto Francisco hoje.

are ungramatical - the first because the iteration is not indefinite, and the second because it is inconsistent with iteration.

換言すれば、第１の理由は、「複合過去は不定回数の反復をあらわす。従って duas vezes のような具体的な反復回数を示す副詞句とは意味上共起できないので(29)(a)が非文になる」ということである。第２の理由は文意が不明瞭であるが要するに「複合過去は不定回数の反復をあらわす。従って、状況が少なくとも１回は実現したことをあらわす、いわゆる経験的完了とのみ共起する副詞句 ainda não とは意味上矛盾するので(29)(b)が非文になる」ということである。

Martin は indefinit iteration についてこれだけしか述べていない。非常に示唆に豊んだ観察であるが、直観的に認めた意味 indefinite iteration を前提とした議論であって、これだけでは「不定回数の反復」を示したことにはならない。ともあれ、ここで用いられた複合過去が意味上どのような副詞句と共起（不）可能かという規準によって、以下でより明確に複合過去の意味を探ってみたい。

《 反　　復 》

先ず次の正常文について考察してみたい。

(1)　João tem visto Maria.

(1)に副詞句 só uma vez （一度だけ）を加えた(2)は非文である。

(2)　*João tem visto Maria só uma vez.

さらに、その他の具体的回数を示す副詞句、たとえば três vezes（三度）を(1)に加えた場合も、やはり

非文である。

(3)　*João tem visto Maria três vezes.

しかしながら具体的回数を明確にしない副詞句、たとえば　muitas vezes（何度も）を(1)に加えた場合は正常文が得られる。

(4)　João tem visto Maria muitas vezes.

以上(1)から(4)についての考察で　"tem visto" の意味が ver という状況の不定回数反復であることが明らかになろう。しかし(2)〜(4)で用いられた副詞句はすべて単純形とも意味的に矛盾なく用いられる。すると単純形の過去の意味との相異が覆い隠されてしまうので、これを明確にするために以下の一組の問答を例に考察してみよう。

(5)　(a)　- Tens ido ao Café A Brasileira ?

(b)　- Não, não tenho.　Fui só uma vez na sexta passada.

(5)(a)で問われたこと、即ち "tens ido" であらわされる状況の否定 (Não, não tenho) は、問題の状況 (ir ao Café A Brasieira) が1回だけ実現したこと (Fui só uma vez. . .)　と意味的に両立している。従って、問(5)(a)であらわれた複合過去には、同一の状況が不定回数反復したという意味が潜在的であることが明らかである。

《継　　続》

複合過去の意味分析を扱った例文の主動詞が先にみたとうり fazer と ver であったためか、Martim は継続の意味には触れていない。しかし先に引用した Dias あるいは Boléo に述べられたように、確かに複合過去は過去のある時点から現在に至る継続の意味をあらわす場合がある。

次の文を考察してみよう。

(6)　António tem estado doente.

(6)は、具体的であるか否かに拘らず、状況の反復回数を制限する副詞句とは意味的に両立しない。[9)]

(7)　*António tem estado doente uma vez.

(8)　*António tem estado doente três vezes.

(9)　*António tem estado doente várias vezes.

ところが、過去のある時点から現在に至る、ある幅をもった期間をあらわす副詞句とは意味的に共起可能である。

(10)　António tem estado doente durante todo este inverno.

どの様な場合に反復ではなく継続の意味になるかは後に扱うこととして、以上(6)から(10)に関する考察より複合過去は同一の状況が継続したことをあらわす場合もあることが明らかになった。

《時間との関係》

以上、今までは直観的に「反復」あるいは「継続」という語で述べられてきた複合過去の意味を副詞句との共起可能性という規準に従ってより正確に把握すべく考察してきた。しかし、「反復」あるいは「継続」が時間の流れと具体的にどのように関わっているかについては、漠然と「過去のある時点から現在に至る期間」と定義することで満足してきた。以下では複合過去の意味が時間とどのように関わっ

ているかを考察したい。

先ず、起点となる「過去のある時点」についてどのような制限があるかを考えてみる。

(11)　João tem estudado o caso.

(11)に、過去のある時点、即ち現在に至る期間の起点を示す副詞句を加えてみる。[10)]

(12)　João tem estudado o caso há uma hora.

(13)　João tem estudado o caso há dez anos.

(14)　João tem estudado o caso há mais de 50 anos.

以上(12)〜(14)かいずれも正常文であることから、起点については具体的な制限のないことがわかる。無論(15)のような文は普通意味をなさないが、「 João が普通の人間である」という条件をはずせば、ある文脈のなかでは十分意味をなす。

(15)　João tem estudado o caso há cerca de dois séculos.

いっぽう「過去のある時点から現在に至る期間」の終点については、「発話の行われる時まで (Dias, 1970, p. 189) 」、「発話の行なわれる現在まで (Cunha e Cintra, 1984, p. 453) 」という説明が一般的である。いっぽうBoléo (1936, p. 136) では「近い過去に行なわれた行為で現在も続行している行為」をあらわすと説明される。これに類するものとして Costa (1976, p. 198) における「 発話の行なわれる時点まで続き、以後も継続し得る行為をあらわす」という複合過去の定義をあげることができる。

これらの諸説を検討してみると、複合過去でとらえられる時間的広がりの限界が、発話時を超えるのかどうか、という問題が浮かび上ってくる。

たとえば次の反復をあらわす例について考察してみよう。

(16)　A renuião tem sido realizada no Parque Municipal.

仮に(16)が厳密な意味で発話の行なわれる時点の状況をもあらわしているなら、(16)の含意として(17)が成り立つことになる。

(17)　A reunião está a ser realizada no Parque Municipal neste momento.

しかしながらインフォーマント調査によれば(17)は必ずしも(16)の含意ではない。無論、集会の演説の最中に(16)が発話される可能性はあるが、定期的に行なわれる集会の前後における状況の描写として用いられるのがより普通であろう。

次に考察すべきは継続をあらわす例である。

(18)　João tem estado muito doente.

(16)の場合と同様に(18)の含意として(19)が成り立つかどうか検討してみる。

(19)　João está muito doente neste momento.

インフォーマント調査によれば、(19)は(18)の含意として必ずしも成り立たない。

以上の考察から明らかなように複合過去のとらえる時間的広がりの限界は、基本的には発話の時点を超えない。しかしながら、インフォーマント調査によれば普通(16)、(18)はそれぞれ(20)、(21)を暗示しているという。

(20)　A reunião continua a ser realizada no Parque Municipal.

(21)　João continua doente.

ところが(22)のような文の連鎖は論理的にまったく問題がない。

(22)　O exame tem sido muito difícil ultimamente. Mas a partir deste ano vai ser mais fácil.

従って(20)、(21)を可能性として示すという、Boléo あるいは Costa の説は、「定期的に行なわれていることは普通続くものだ」あるいは「大病はそう簡単には治らない」といった言語外的「常識」による判断といってよかろう。

よって、複合過去のとらえる時間的広がりは、「過去のある時点から発話時に至るまで」と定義しておけば十分であると考えられる。

《反復か継続か》

これまでの考察では、複合過去が反復をあらわす場合もあれば継続をあらわす場合もあるということを述べただけで、どのようにしてこれら二様の意味が生ずるかは触れなかった。

これまでの例からも容易に察せられるように、反復／継続の相異は、過去分詞であらわされる主動詞以下の意味によっていると考えられ、問題は非常に複雑である。

Boléo (1936) ではこの点について触れていない。これに対し Castilho (1968) は、複合過去の意味の相異は「動詞の意義素の性質」によると述べている（p. 57）。先ず、意義素に二種を認め以下のように定義している (p.55 e 56).

Notamos dois tipos de semantemas, uns a exprimirem ação tendente a um fim, sem o qual essa ação não se dá, outros figurando o processo em sua duração da qual não se exige completamento para admitir-lhe a existência. Aos primeiros, chamamos "télicos" (matar, morrer, cair, engolir, atirar, descobrir, iluminar, mergulhar, rejeitar, etc.) e aos segundos, mais numerosos, "atélicos" (mastigar, viver, escrever, acompanhar, dormir, andar, aturar, aumentar, chover, contemplar, escutar, pensar, rir, etc.). Tais verbos, em suma, ou figuram uma ação-ponto (télicos), ou uma ação-linha (atélicos).

そして、複合過去の意味について、動詞が télico ならば iterativo であり、動詞が atélico ならば durativo か cursivo であると述べている (p. 57). Castilho はさまざまな例について以下、「この場合は反復（あるいは継続）をあらわす。なぜならば動詞が télico （あるいは atélico ）だからである」と説明する。[12)]

しかし肝腎なことは、いかに télico/atélico を区別するかということである。言語による定義で tautology に陥る危険を考慮に入れたうえで、先に引用した Castilho の定義に従うこともできよう。いっぽう、筆者は以前 Lyons (1977) の分類にしたがって、[11)] 動詞の意味のアスペクト的性格により、状況を evento, processo および estado の三つの異なる種類に分類するため、ある種の副詞句と動詞を直接法現在においた文とが意味的に共起し得るか否かを規準に用いる方法を提案したことがあった。[13)] たとえば、de repente および num instante という副詞句との共起可能性を、直観的に最も典型的と思われる evento (e.g. estourar), processo (e.g. reproduzir a imagem do santo) および estado (e.g. gostar de filmes de cowboy) について示せば以下の通りである。

(23) (a)　O pneu estoura.

(b)　O pneu estoura de repente.

(c)　O pneu esoura num instante.

(24) (a) O entalhador reproduz a imagem do santo.

(b) *O entalhador reproduz de repente a imagem do santo.

(c) O entalhador reproduz num instante a imagem do santo.

(25) (a) O Pedro gosta de filmes de cowboy.

(b) *O Pedro gosta de repente de filmes de cowboy.

(c) *O Pedro gosta num instante de filmes de cowboy.

以上を表にして示せば次のとうりである

	"de repente'.	"num instante"
EVENTO	○	○
PROCESSO	×	○
ESTADO	×	×

○：共起可能　　×：共起不可能

アスペクト的性格による分類を可能にする意味で、上で述べた規準は有効である。しかし複合過去の形をとった時、 evento は反復、processo と estado は継続をあらわすというように簡単には定義できない。たとえば、(26)であらわされる状況は上述の規準により processo と分類されよう。

(26) (a) Carlos estuda toda a lição.

(b) *Carlos estuda de repente toda a lição.

(c) Carlos estuda num instante toda a lição.

では estudar toda a lição の複合をもつ文を次に考える。

(27) Carlos tem estudado toda a lição.

(27)では確かに「継続」の意味があらわされているといえるが、副詞句 nas aulas を加えると事情は変わってくる。

(28) Carlos tem estudado toda a lição nas aulas.

すなわち、(28)では estudar toda a lição という状況が授業中は実現してきた、という反復をあらわすことになる。こうした事情は estado についてもあてはまる。たとえば ser gentil comigo という典型的な estado をあらわす状況の複合形について考えてみよう。

(29) Júlio tem sido muito gentil comigo.

(30) Júlio tem sido muito gentil comigo nas festas.

(29)では明らかに「継続」をあらわしているが(30)では ser muito gentil という状況がパーティーの時は実現してきたわけであるから、やはり反復をあらわしていることになってしまう。[14)]

いっぽう、物理的に確かに中断があっても、同一の状況をひとつの連続としてとらえ述べる表現に ter の直接法現在＋vindo＋a ＋不定法という迂言表現がある。この表現は、概ね vir ＋現在分詞の進行の意味を複合過去に組み込んだものと言え、継続を強調した表現である。[15)]

(31) Na sequência do discurso de encerramento, na Figuira da Foz, *tenho vindo a actuar* de modo a congregar todos os militantes que de boa-fé queiram colaborar na luta pelo regresso

do PSD à posição de primeiro partido nacional. (pág. 30, Diário de Notícias, de 23/06/85).

Este ano, a Câmara Municipal de Evora *tem vindo a preparar* cuidadosamente a Edição/85 da Feira, que é inaugrada hoje, e se prolonga até 1 de Julho. (pág. 14, DN, de 21/06/85).

以上の考察を総括すれば、複合過去の意味 — 反復か継続か — は確かに主動詞以下の意味、即ちそのアスペクト的性格によって決まる。しかしながらアスペクト的性格そのものが、副詞句の有無により微妙に変化するため、分類が容易でないばかりか分類規準も完璧を期し難い。よって現在のところ、複合過去の意味は、主動詞以下の意味をコンテクストの中でその都度考えていく他ないのである。

Ⅳ 結　　び

以上、ポルトガル語の複合過去について通時的に概観したうえで、そのあらわす意味を考察した。

今までの直観的認識にもとづく説明から離れて、副詞句との共起可能性を主たる規準として意味を規定すべく考察した結果、漠然ととらえられていた時間との関係および反復・継続の意味の相異については、問題の本質がかなり明確に提示できたと信ずる。

いずれにせよ、「複合過去のなりたち」の章で述べたとうり、先人達の努力にもかかわらず、通時的な意味研究は興味深いテーマでありながら困難な問題をいくつも抱えている。ともあれ、この面でのより実証的研究を進めていけばこそ、ロマンス諸語のうちでも特異な位置を占めるといわれるポルトガル語の複合過去の性質がより明らかになるものと考えられるのである。

1985年　夏

PRETÉRITO PERFEITO COMPOSTO EM PORTUGUÊS

Shiro IYANAGA

Entre as línguas românicas em que se verifica, em geral, a substituição do Pretérito Simples pelo Pretérito Composto ou o gradual desaparecimento daquele tempo verbal, o português apresenta uma peculiaridade: a conservação, em toda a sua vitalidade, do Pretérito Simples e a singular função semântica do Pretérito Composto.

Passando em revista os importantes estudos anteriores sobre o tema, focaliza-se, em primeiro lugar, a evolução do tempo em questão, desde a forma perifrástica em latim "habeo + p.p." até a forma actual "tenho + p.p.".

Destaca-se, por outro lado, a análise semântica do Pretérito Composto, utilizando o critério de compatibilidade com certas frases adverbiais, em vez da explicação tradicional baseada na apreensão intuitiva do significado. Define-se, deste modo, a função semântica do Pretérito Composto, que exprime, a grosso modo, " a iteraçao indefinida ou a duração que se estende de um certo momento no passado até o presente".

註

1） 本稿は昭和５５年度提出修士論文 Estudo do Aspecto na Língua Portuguesa – Análise Semântica das Perífrases Verbais の第５章 Temp e Aspecto, 第４節 Novo Sistema de Tempo e Seus Problemas (p. 139 – 145). で扱った内容にもとづき、加筆、修正したものである。

2） 出典は以下の通り。複合完全過去（浜口乃二雄・佐野泰彦『ポルトガル語小辞典』大学書林）、完了過去（友田金三『基本ブラジル葡語講座』拓人社１９６２）、現在完了（富野幹雄・高橋都彦『ブラジル　ポルトガル語の入門』白水社、１９７４）。

3） Perfect については、たとえば Comrie (1978) p. 52-65 参照。

4） 主な参考文献は Cuesta & Luz (1971), Elcock (1960), Iordan (1970), Maurer (1959), ポズナー（１９８２），島岡（１９７０）など。

5） 松平千秋・国原吉之助（１９６８）p. 77.

6） Boléo の時代区分がどのような規準にもとづいているのかは明確でない。ポルトガル語史を考えるうえでの時代区分について詳しくは池上（１９８４）p. 68 以下参照。

7） Boléo (1936) は以下のように述べている（p. 232）。

E no cap. XLIII da "Crónica de D. Joao I" contam-se 23 perfeitos simples e só um perfeito composto: "desta guisa que *avees ouvido*". Em mais de cem capítulos lidos, o perfeito composto com *haver* e *ter* quási se circunscreve na "Crónica" a estas oraçoes explicativas: "segundo em cima já *teedes ouvido*" (cap. 26), "segundo ante *avees ouvido*" (cap. 29).

またポルトガル語の複合過去の用いられる頻度が他のロマンス諸語と比べていかに小さいかについては、たとえば、森本英夫（１９８０）参照。

8） ガリシア語の teño + p.p. とポルトガル語の複合過去を比較すると興味深い事実が理解される。ガリシア語ではポルトガル語の複合過去に相当する teño + p.p. の形式は時称体系の一部をなしておらず、単なる迂言的表現のひとつとして扱われているが、(c.f. cuesta y Luz, 1971, p.116 あるいは、Instituto de la Lengua Gallega, 1975, vol. I, p.173, vol III. p. 150) その意味はポルトガル語の複合過去の意味と一致している。１４世紀半ば以降、それまで一体をなしていた galego-português が急速に分離傾向を強めそれぞれ独自の変化を経て現代のポルトガル語とガリシア語が成立した。それにも拘らずこの二言語が形式的（ haver でなく ter を選んだ）にも意味的（「反復」あるいは「継続」をあらわす）にも共通しているということは、すでに galego-português の段階でこの共通性の素地があったことを示すと言えないだろうか。文体的な理由で記録に残されにくかったということも考えられよう。たとえば現代の andar + a + infinitivo の如きはあまりに口語的でありすぎるため、書かれた言語には、小説の会話部分以外にあらわれることはまずあり得ない。これに似た文体的制限が複合形に加えられていたことも十分に考えられるが、より詳細な文献調査が先決であることは言うまでもない。

9） 具体的な反復回数をあらわす副詞句と共起できるのは単純形である。 c.f. António esteve doente uma vez (três vezes, várias vezes).

10) 現在の状況を含む場合は、現在形が用いられる。 e.g. João estuda o caso há mais de 50 anos.

11） Lyons (1977) は以下のように述べている (vol. II, p.707).

Events, it will be recalled, are non-extended dynamic situations that occur, momentarily,

in time; processes are extended dynamic situations that last, or endure, through time; states are like processes in that they are homogeneous throughout the period of their existence;

12) Costa (1976) も momentary lexeme および durative lexeme という用語を用いてはいるが、Castilho と概ね同様の分類を示している (p. 198).

13) 詳細は Iyanaga (1981) p. 12～23 参照。

14) 例文(29)およびそれに関連する考察は Travaglia (1981) による(p. 187)。

15) その他にも tenho estado a + infinitivo あるいは、きわめて口語的な表現として tenho andado a + infinitivo がある。いずれもポルトガルでは用いられるがブラジルでは用いられない表現である。その理由は定かではないが、ブラジルでは a + inf. という形式を基本的には認めず現在分詞を用いるので、結果として起りうる音の重複を嫌うためとも考えられるが確証はない。

BIBLIOGRAFIA

BOLÉO, Manuel de Paiva (1936) - *O Perfeito e o Pretérito em Português em Confronto com as Outras Línguas Românicas,* Coimbra.

CASTILHO, A. T. de (1968) - *Introdução ao estudo do aspecto verbal na língua portuguesa,* in: *Alfa nº 12,* Marília.

COMRIE, Bernard (1976) - *Aspect*, Cambridge.

COSTA, Albano Dias da (1976) - *Peripherastic Verbal Expressions in Portuguese,* in: J. Schmidt-Radefeldt - *Readings in Portuguese Linguistics,* Amsterdam, (p. 187 - 243).

CUESTA, P.V. y LUZ, M. A. M. da (1971) - *Gramática Portuguesa*, Madrid.

CUNHA, C e CINTRA, L (1984) - *Nova Gramática do Português Contemporâneo*, Lisboa.

DIAS, Epiphanio (1970) - *Syntaxe Histórica Portuguesa* (5ª ed.) - (1ª ed. foi publicada em 1918), Lisboa.

ELCOCK, W. D. (1960) - *The Romance Language,* London.

池上岑夫(1984)－『ポルトガル語とガリシア語 －その成立と展開－』東京.

Instituto dela Lengua Gallega (1975) - *Gallego I, II* y *III,* Santiago de Compostela.

IORDAN-OOR (1970) - *An Introduction to Romance Linguistics,* Oxford.

IYANAGA, Shiro (1981) - *Estudo do aspecto na língua portuguesa - análise semântica das perífrases verbais,* Tóquio.

LYONS, John (1977) - *Semantics I and II,* London.

MARTIN, J. W. (1976) - *Tense, Mood and the 'inflected infinitive' in Portuguese,* in: J. Schmidt--Radefeldt - *Readings in Portuguese Linguistics,* Amsterdam, (p. 1 - 61).

MAURER JR.,T. H. (1959) - *Gramática do Latim Vulgar*, Rio de Janeiro.

森本英夫(1980)－『ポルトガル語における haver と ter (I)－Lusíadas の場合』 in：ロマンス語研究 12, 東京.

ポズナー，R.（1982）－『ロマンス語入門』（風間，長神　訳），東京.

島岡　茂（1970）－『ロマンス語の話』，東京.

TRAVAGLIA, Luiz Carlos (1981) - *O Aspecto Verbal no Português - a Categoria e sua Expressão*, Uberlândia.

ロマンス語研究　19

1986年4月30日 発行

編集兼発行者　日本ロマンス語学会
代表者　近松洋男

事務局　東京都新宿区高田馬場1丁目33番6号
平和相互ビル704
TEL 東京(03)208-5445・5446
振込銀行　東海銀行高田馬場支店
657-304-216

印刷所　近藤印刷株式会社 ☎(06)461-0085